

主 題：愛された者の愛の応答

聖書箇所：ヨハネの福音書15章12－17節

テーマ：“キリストの愛に特徴づけられた者として成長する”

今朝、今年度最初のみことばとして、皆さんと見たいのは、私たちの愛する主イエス様のことばであるヨハネ15：12－17です。きょうのタイトルにもしましたけれども、この箇所を通して、私たちは愛された者の愛の応答について、ともに考えていきたいと思えます。

でも、その前にきょうはまず皆さんに簡単な質問があります。今から幾つかの人物や物の名前を挙げるので、その名前を聞いて、すぐに何が頭に思い浮かぶかを考えてみてください。岸田文雄——日本の総理大臣です。大谷翔平——二刀流の野球選手です。Apple——たとえば、電化製品のiphoneやipadを思い浮かべる人も多いかもかもしれません。ほかにもいろいろなことを挙げることはできますけれども、興味深いことに、私たちの周りには〇〇と言えこれといったものがたくさんあります。

では最後に「クリスチャン」と言われれば何を思い浮かべるでしょうか？ある人は聖書と言うかもしれませんし、ある人は教会やその建物と言うかもしれません。クリスチャンは、一体何によって知られるべき存在なのでしょう？その答えは明白です。なぜなら、イエス様ご自身が私たちにその答えを与えてくれたからです。その答えはヨハネ13：34－35に記されていました。「34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と。もし互いの間に愛が存在しているのであれば、それによってすべての人がイエスの弟子であることを知るようになると、イエス様ははっきりと言われていました。

では、私たちはほかの人を愛する者として周りから知られている、そんなクリスチャンでしょうか？神様への愛、また互いの間の愛がイエス様の弟子として歩んでいる者の特徴であるとすれば、果たして私たちは愛を実践する者として歩んでいるのでしょうか？私たちは今、兄弟姉妹を、神の家族である教会を愛する者として歩んでいるのでしょうか？それとも愛することに難しさを覚えているのでしょうか？少し立ち止まって考えてみてください。今現在、皆さんにとってキリストの愛を示すことに難しさを覚える人はいるのでしょうか？ある人にとっては、同じ教会に属する兄弟姉妹のひとりかもしれません。ある人にとっては職場や学校、周りに住む未信者かもしれません。ある人にとっては、自分の夫や妻、自分の子どもや親、兄弟かもしれません。その人物のことを思い浮かべる時に、心に嫌な思いが出てきてしまう。あなたにとって、どうしても愛を実践することが困難に思えるような存在は一体だれでしょう？これから私たちはともにイエス様のことばを見ていくのですけれども、その間、皆さんにしてほしいことが一つあります。それはみことばが教えている、この真理が示されるたびに、今自分が心のうちに挙げているその人物を、まるでその人物が目の前に座っているかのように、立っているかのように思い浮かべて、そして、イエス様が互いに愛し合いなさいと求めておられる、愛を示される時に、私は、この人を愛することができるのかと、自分自身に問いかけてみてください。イエス様がしなさいと言われていたその愛でもって、果たしてその人物に愛を示すことができるのかと。

○キリストの教える愛：四つの真理

今朝、私たちが学ぶのは、先ほども言いましたけれども、ヨハネ15：12－17です。ご自身が間もなく十字架にかかることをご存じであったイエス様は、ここで自分の弟子たちが実践すべき愛について、特に大切な四つの真理を教えてください。それらが一体何なのかを、新年度を始めるに当たって、改めて一緒に考えてみたいと思えます。私たちひとりひとりが、また何よりも神の家族であるこ

の教会がますますキリストの愛によって特徴づけられるものになっていくことを期待して、このみことばが皆さんの励まし、助けになることを心から祈っています。

ではまず、いつものようにみことばをお読みしますので、12-17節をご覧ください。

ヨハネ15：12-17

「:12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。:13 人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。:14 わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行うなら、あなたがたはわたしの友です。:15 わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。:16 あなたがたがわたしを選んだわけではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。:17 あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです。」

1. 愛の根源 12節

さて、キリストの教える愛について、一つ目の真理を12節に見て取ることができます。それは愛の根源、愛の源についてです。12節でイエス様は「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです」と言われていました。ここでイエス様は弟子たちに対して戒めを与えておられました。ご自分に従う者たちに対してはっきりとした命令を示していたのです。要するにこの命令は救われているすべての者に対して、今、主に従ってキリストの弟子として歩んでいるすべてのクリスチャンに対して、私や皆さんに対しても当てはまるものだという事です。

では、イエス様がどんな命令を与えられていたのか？主は「兄弟たち、あなたがたは互いに愛し合いなさい」と言われていました。思い返してみれば、これはイエス様が最も大切な戒めの一つとして示されたものでもありました。ひとりの律法の専門家がイエス様のところへやって来て、イエス様を試そうとして尋ねていました。「先生、律法の中で大切な戒めはどれですか」と。それに対して主はマタイ22：37-40で、「:37 ……『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』:38 これがたいせつな第一の戒めです。:39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。:40 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」と答えたのです。信仰者にとって、隣人を愛するという事は、心と思い、自分のすべてをもって主を愛するのと同じくらい重要なものでした。またここでたいせつなことは、今、私たちが見た箇所用いられている「愛せよ」という表現と、きょう私たちが見ているヨハネ15：12に出てきた「愛し合う」という表現のどちらにも“アガペー”というギリシャ語が用いられているということです。このアガペーの愛というのは、聖書に用いられているほかの「愛」と訳されることば、例えば特に夫婦間における肉体的、性的な愛を意味するエロスであったり、感情的でだれかに強い興味や温かい感情、愛情を抱くようなことを意味するフィレオといったものとは異なるものでした。アガペーということばが愛に用いられる時は、それは単に感情で終わるのではなく、意志を持って、みずから進んでだれかの益のために自分自身を捧げる、そんな犠牲的な愛を表していたのです。だれかのことを心から愛するからこそ、このアガペーの愛というのは感情でとどまるのではなく、犠牲的な行動をもって、その人に喜んで仕えようとするのです。主はそのような愛をもって互いに愛し合うようにと命令されていました。自分に従ってくる信仰者ひとりひとりが犠牲を払って互いに愛し合うことを求められていたのです。

ここで少し考えてほしいのですが、イエス様はこの命令を、その場を出ていたイスカリオテのユダを除く11人の弟子に対して話しておられました。彼らは全く問題を犯すことなく、いつも完璧に主に従っていた弟子たちではなく、問題だらけで、いつも互いに争っていた者たちだったのです。彼らは

最後の晚餐をともにする以前にも、また最後の晚餐をともにしている時にも、自分たちの中でだれが一番偉いのかということ争っていました。また、彼らは最後の晚餐をともにする時になって、自分たちの手を汚して、主人であるイエス様だけでなく、ほかの兄弟たちの足を洗おうとはしませんでした。彼らは互いに言い争っていました。ペテロさん、あなたはいつも十二弟子を代表してしゃべっているけれども、本当を言うと、私の方がすぐれていますと。ヤコブとヨハネさん、あなた方は以前、栄光の座で自分たちを主の右と左にそれぞれ座らせてくださいと、私たちに黙って主に願っていました。そんなことあり得ません、私の方がすぐれていますと。だれが私の足を洗ってくれるのでしょうか、私こそが仕えられるべき存在ですと。弟子たちはそのようにして、何度も何度もだれが一番偉いのか、だれが仕えられるべきなのかということ争っていました。そしてそれだけではなくて、弟子たちは挙句、イエス様が最も苦しみを受けて助けを必要とする時に主を見捨てて逃げて行ったのです。

こんなプライドにあふれていて、不誠実だった弟子たちに向かって、イエス様は「兄弟たち、互いに愛し合いなさい」と言うのです。これを聞いて、一体どうしたらこんな彼らが互いに愛し合うことができるのだらうと思いませんか？だれが一番偉いのかを常に言い争っていた者たちが、自分をへりくだらせて、犠牲を払って愛することが果たしてできるのだらうかと。彼らは本当にキリストの愛を互いの間で実践することができるのだらうかと。同時に、こんな彼らの姿を覚えて、自分の歩みを振り返って見れば、私たち自身も彼らと何ら変わるものがない存在であることに気づかされるのです。互いに愛し合いなさいという命令は、ここにおられる皆さんはもう何度も聞いているはずですが、何度も聞いているからこそもちろん知識としては持っています。兄弟姉妹を愛することが大切だとよくわかっているからこそ、それを実践しようともします。でも正直になれば、私たちは時に愛を示しやすい人と、愛を示すことが難しい人に出くわすのです。この人には喜んで自分は愛を示せる、そんな人がいるかもしれませんが、この人は自分の頭を悩ませるようなことは何も起こさないし、信頼できるからこの人のためだったら、私は喜んで犠牲を払ってでも愛を示しましょうと。でもその逆はどうでしょう？もしある人がいつも何らかの形に問題を引き起こして、横柄でプライドにあふれていて、事あるごとに自分を傷つけ、悲しませるようなことがあったとすれば、果たしてそんな人に対しても、私たちは同じようにみずから進んで愛を示そうとするのでしょうか？そんな人に対して愛を示すのが難しく、愛ではなく、怒りや不満を示しているかもしれません。もしかしたら、そんな人からできるだけ離れて関わらないようにするかもしれません。もし愛を実践することの選択肢が私たちに与えられていたのだとすれば、それが難しい人には愛を示そうとしない、そんな選択に私たちは傾いてしまう弱さを持っているのです。私たちには兄弟姉妹に愛を示すことが難しく覚えることがあり、何より私たちのうちを見た時に、そんな犠牲的な愛をもって、みずから喜んでだれにでも愛を示す、そんな愛が存在していないことを私たちは見て取ることができるのです。でも、こんな私たちにも主は言われます。兄弟姉妹たち、互いに愛し合いなさいと。

果たして、こんなキリストの愛を私たちは互いの間で実践することができるのでしょうか？お互いに愛し合うためのその愛が、私たち自身の力や意思に求められるのであれば、それは絶対に不可能でした。でも唯一、私たちがこの命令に従うことができる方法があります。それは私たちがまず神様の愛を受け取ることでした。神様の愛を知り、その愛を信じ、その愛のうちにとどまり続けること、それが私たちが唯一互いに愛し合うことができる方法なのです。ヨハネはこの真理を繰り返し自身の手紙の中で説明しています。Ⅰヨハネ3：16を見れば、「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」、Ⅰヨハネ4：10-11を見れば、「:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」、そ

して、同じ4：19に「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」とあります。もし私たちが兄弟姉妹のだれかを愛することに難しさを感じるのであれば、自分にはこの人を愛することができないとそう訴えるのであれば、まさにそのとおりです。私たちにはできません。でも神様はそれをなされるお方です。そして、そのようにして愛することができる、この方の愛を受けるのであれば、この方の愛が私たちのうちにあるのであれば、私たちはその愛でもって愛を示すことができるというのです。

ある時、私自身は思い込もうとするかもしれません。神様、あなたは私をご覧になれる時はいつも笑顔です。でも、あの人をご覧になる時は怒っているに違いありません。自分にこんなひどいことをした人に対して、私も腹を立てるけれども、あなたも同じように腹を立てているはずです。あの方は私が考える正しさに沿わないふるまいをして生きています。そんな人をあなたも喜んでおられないはずだと。私たちはこうやって自分の基準を神様に当てはめようとするところがあるかもしれません。でも私たちが覚えなければいけないことは、神様はご自分の子どもたちをみな同じように愛されているということです。私たちは兄弟姉妹を愛することに難しさを感じるかもしれません。だれかの姿を覚える時に、喜べないこともあるかもしれません。でも、神様はそうではないのです。神様はご自分の元に心碎かれ、悔い改めと信仰をもってやって来た者にあわれみをもって救いを与えてくださいました。私たちのうちには弱さがあって、悲しいことに救われた後も何度も何度も過ちを犯してしまう、罪を犯してしまう、そんな愚かな者にも関わらず、神様は私たちに変わらず愛を示してくださるのです。聖なる神様はもちろん罪をよしとはされません。だからこそ、罪を犯せば、私たちが懲らしめられることもあります。でも、その懲らしめさえも、ご自分の子どもが成長することを願う父の愛のゆえでした。だからヘブル12：6にこう書いてあります。「主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」と。私たちは自分自身の力で、互いに愛し合いなさいという命令に従っていくことなど絶対にできません。でも神様はすべての人をご自分のものを愛されるお方です。だからこそ、私たちは信仰をもって主を見上げ、神様の愛をいただき、助けを祈り求めながら愛を実践することを願って歩いていくことです。この神様の愛が私たちのうちにあるのであれば、この愛にとどまっているのであれば、私たちは愛を実践することができるということです。

2. 愛のかたち 13節

続けて、キリストの教える愛についての二つ目の真理は、愛のかたちでした。もう一度12－13節を見てください。イエス様はこう言われていました。「12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。13 人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」と。イエス様はここで、ご自分の弟子たちがどのようなかたちで愛を実践するべきなのかを教えておられました。互いに愛し合いなさいと言われた時に、イエス様は弟子たちが漠然と愛を示すことは求めていなかったのです。イエス様が求められた愛には明白なかたちが、明白な姿がありました。それは一体どんなものだったのかというと、「わたしがあなたがたを愛したように」と言われていました。具体的にどんなふうにかというと13節に「人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません」とあります。イエス様が示された最高の愛は、この方が喜んでみずから進んで十字架にかかり、ご自分の民のためにその身を捧げられたということでした。ほかの人のために死ぬということ、これこそが最高の愛の表現だったのです。そしてイエス様はこんな愛のかたちでもって、弟子たちが互いに愛し合うようにと求めていたのです。

しかし、人がだれかのためにいのちを捨てるというのは、実際にどんな愛で互いを愛し合うことなのでしょう？実際に主は何を求めておられるのでしょうか？もちろん、ある意味これはこのことばどおり取ることもできるでしょう。ある時、危険や困難に陥っているだれかのために、自分の身を差し出してそのいのちをささげるということです。教会の歴史を振り返ってみても、多くのクリスチャンたちがほ

かの兄弟姉妹を守るために、自分のいのちを捨てて殉教して行くこともありました。文字どおり、この命令をだれかのために自分のいのちを捨てることと考えることも、あるいはできるでしょう。でも、もしそれだけなのだとしたら、この命令は私たちが人生でたった一回だけ実践できるものになるのです。だからこそ、ここでイエス様が強調しようとされていたことにはほかの意味がありました。人がだれかのためにいのちを捨てるというのは、自分の実際のいのちをささげることよりも、だれかほかの人のために喜んで自分の身をささげる姿のことを言っていたのです。

言いかえれば、だれかのためにいのちを捨てるというのは、ほかの人を愛するために自分自身に対して死ぬということです。思い返せば、まさにこれはイエス様がご自分に従おうとするすべての者に対して求めておられたことでした。ルカ9：23には「イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と書かれていました。自分を捨てるということ、日々自分の十字架を負うということ、これがキリストの弟子として従っていくことに必要不可欠なものでした。つまり、自分の弱さやプライド、自分勝手さであったり、この世を思う自分の気持ち、キリストを主人とするのではなく、自分を主人とするような、自分を一番とするようなありとあらゆる罪に対して、私たちは日々すべてに対して死ぬ必要があると言うのです。そしてこれが自分を捨てるということ、自分自身に対して死ぬということだったわけですがけれども、そんな自分に対して死ぬ姿、ほかの人のために自分のいのちを捨てる姿をもって、イエス様は互いに愛し合うことを弟子たちに、私たちにも求められていたのです。

もう少し具体的に考えてみましょう。私たちが互いに愛し合う時に、それを妨げるものは一体何でしょう？ある人は言うかもしれません。彼は私の愛には値しません。彼が私に対して先にひどいことをしました、彼が悪いのです、彼にふさわしいのは罰だけですと。もしそんなふうを考えるのだとすれば、その敵意やねたみといったものは死ななければいけないということです。ある人は言うかもしれません。彼女がやっていることは間違っていて、どう考えても自分の考えていることが正しいです。でも、自分のことばに彼女が耳を傾けないのだとしたら、そんな人のことは知りません。もしそんなふうを考えるのだとすれば、そのプライドや独善的な思いというものは死ななければいけないということです。ある人は言うかもしれません。彼は助けを必要としています。でも、自分にはいろいろなことがあって疲れしました。だから別に自分が行かなくても、ほかの人がやればいいのではないかと考えるのであれば、その自分勝手さは死ななければいけないということです。

ここでのポイントは、たとえそれがどのようなものであったとしても、私たちがだれかのために喜んで自分の身をささげること、キリストの愛を実践することを妨げるものがあるのだとすれば、それらはすべて死ななければいけないということです。パウロもピリピ2：3-4で「:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」と語っていました。パウロは、自分自身にとらわれて自己中心的になるのではなく、プライドにあふれるのではなくて、互いにへりくだって人は自分よりもすぐれたものであると考えなさいと求めていました。そして、そんな命令を彼らにしたのは明白な理由、明白な根拠がありました。パウロは続きの5節に「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」と書いています。パウロが弟子たちに、兄弟姉妹たちにへりくだりなさいと求めた理由は、それがイエス・キリストのうちにも見られるものだったからでした。それが、彼らが模範とするべき、彼らが従うべき、追い求めるべき基準だったからです。神の御子であるイエス・キリストが人となってこの世に来られただけでなく、人に仕える者となられました。そしてこの方はご自分を卑しくして、実に十字架の死にまでも従われたのです。本来であれば、この方こそが人に仕えられるべき存在であるにもかかわらず、イエス様は愛のゆえに十字架の上で罪に対する燃える神

の怒りをその身に受けてくださいました。本来であれば、私たちが受けるべき神様の怒りの杯をすべて飲み干してくださったのです。

神のひとり子がほかのだれでもない。私たちの罪のために刺し通されて、だれも経験したことのない、想像を絶するほどの痛みと苦しみを味わわれました。イエス様はそのようにしてへりくだって、犠牲的な愛を示されたのです。だからこそ、もし私たちがだれかを愛することに難しさを覚えるのだとすれば、だれかに対して非難する思いや不安を覚えるのだとすれば、だれかに対して心の中で怒りや憤りを覚えることがあるのだとすれば、ただ主を見上げることです。キリストが何をなされたのかを覚え続けることです。この方がどのようなのしりや恥を受けて、そして十字架を背負ってゴルゴダの丘へと向かって行ったのか、この方がどのような苦しみを負って十字架の上で死なれたのか、どのような犠牲を払ってあなたや私を愛してくださったのか、そのことを覚え続けることです。主は実際にご自分のいのちを私たちのためにささげてくださいました。その愛を覚えて、互いに愛し合うことを実践していくことです。たとえそれがどのようなものであったとしても、もし私たちのうちに、だれかのために喜んで自分の身をささげることを妨げるものがあるのだとすれば、そのようなものはすべて死ななければいけないということです。愛というのは、だれかのために自分を捨てるという選択だからです。時に私たちは自分の思いや願いをほかの人の益のために捨てるのです。だれかに傷つけられた時に、自分の正当性や正しさを主張することもできます。でも、それを捨てて、代わりにその人を許そうとするのです。愛はだれかに対する許せない思いも、苦い思いも、不平不満も、敵意や怒りも、プライドも、自分勝手さも、そんな自分自身のすべてに対して死ぬことが求められているのです。愛というのは犠牲的なものだ。なぜかという、キリストの愛が犠牲的なものだったからでした。

キリストの愛は、だれかのために自分を捨てて身をささげることでした。言い換えれば、愛は自分にとって都合の良い時だけ犠牲を払います、自分に時間や体力やいろいろな余裕がある時だけ身をささげます、そんなことにはならないのです。なぜかという、そこには一切の犠牲が、死がないからです。私たちに示されたキリストの愛を覚える時に、主はあり得ないほどの犠牲を払ってくださいました。その愛を私たちが受けたのだとすれば、どんな愛を私たちは今、互いの中で神様のために実践しようとしているのでしょうか？ 私たちはどんな犠牲を払おうとしているのでしょうか？ だれかほかの人のために自分を捨て、自分の身をささげる。これがキリストの教える愛の真理、二つ目の愛のかたちでした。

3. 愛の証明 14節

キリストの教える愛について挙げられていた三つ目の真理は、愛の証明です。14節に「わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行うなら、あなたがたはわたしの友です。」と記されていました。ここで、「あなたがたはわたしの友です」とイエス様は言われていましたけれども、簡潔に言えば、これはその人物がクリスチャンだということです。この人物が一方向的にキリストのことを知っている、関係を持っているのではなくて、キリスト自身もこの人物のことを知っておられて、関係を持っているのです。ですからイエス様は「わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行うなら、あなたがたはわたしの友です」と続けていました。あなた方は私と関係を持っていますと。では命じていることは何だったのかというと、それはもちろん今まで見てきた互いに愛し合うということでした。ポイントはこういうことです。もしクリスチャンが互いに愛し合うのであれば、それがあなたが本当に救われていること、あなたが本当にキリストと関係を持っていることの証明になるということです。逆を言えば、たとえ自分はクリスチャンだと口にしていても、そのような愛をいっさい示そうとしないのであれば、その信仰はにせものであって、キリストの友と呼ばれる関係にはないということです。

もちろんここで注意してほしいのは、互いに愛し合うことがその人に救いをもたらすではありません。救いは私たちのどんな行いによってももたらされないのです。でも、私たちが互いに愛し合うことが、私たちがキリストの愛を知っていることの証明になるのです。このことに関しては、Iヨハネ4：

7-8でヨハネも「:7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。:8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」と言っていました。また、D・A・カーソンという聖書学者もこの箇所に関して、わかりやすくこんなふうには言っていました。「この従順さは、彼らを友人にするものではなく、彼の友人であることを特徴づけるものである。」と。聖書が繰り返し教えていることは、神様の愛を知っている者、神様の愛をうちに持っている者はだれでも、必然的にその神様の愛を互いの間で実践するようになるということです。だから、もし私たちが神様の愛を知っていると口にしていながらも、いつも兄弟姉妹のことを忌み嫌っているのだとすれば、その愛が自分のうちから流れ出していないのだとすれば、その信仰が本物かどうかよく考えなければいけないということです。キリストの友として歩む者は、どんな時も互いに愛することを実践して歩もうとするのです。これは何も失敗しないという話をしているわけではありません。でも、キリストの愛を覚える時に、互いに愛し合うことを喜んでなしていきたいという思いを持って歩み続けるのです。

考えてみれば、この愛は、この世が考えているものとは全く異なるということです。世の中の多くの人を考えると、何かしらの問題や争いが生じたら、そのような関係をまず絶つことを考えるかもしれません。自分のことを理解してくれる人はいいいです、でも自分のことを傷つけるような人、悲しませるような人は自分には要りませんと言って、その人を自分の輪の中から追い出そうとしたり、追い出せない時はできるだけ関わらないようにして話をしなかつたりするかもしれません。関係を持たないようにするという、そこに問題の解決を、そこに自分自身の平安を見出そうとするのです。でも、これはキリストが私たちに示してくださった愛ではありませんでした。あの十字架が与えてくださった赦しやあわれみの姿ではありませんでした。もしイエス様がそんなかたちで私たちのことを愛されていたのだとしたら、私たちは一体どうなるでしょう？キリストが私たちのうちにある弱さやプライドをご覧になって、私たちが日々犯すその罪をご覧になって、どうしてあなたは何度も何度も私の忌み嫌うことを行うのですか、そんなあなたのことなんて私はもう知りません、あなたとはもういっさいの関係をもちません、あなたの友には決してなることはできませんと、もし言われたらどうでしょう？私たちに絶望しかないので。でも感謝なことに、主の赦しはそのようなものではありませんでした。イエス様が十字架にかかってくださって、私たちに代わって罪の代価を支払ってくださった時に、この方は私たちのすべての罪を赦してくださいました。過去も今もまた未来の罪もすべて赦してくださったのです。これは私たちが何ら問題のない正しく良い行いをしていただけではありません。私たちが神様の前を逆らって歩む、そんな罪人であった時に、この方が一方的に恵みを示してくださったのです。私たちが何かをしたからではなくて、ご自身の一方的な恵みによって、一方的な愛によって、神様は私たちの罪をキリストにあつて、もう二度と思い出すことはないという約束を与えてくださいました。

私たちがこの愛を、このキリストの姿を知っているのだとすれば、私たちが互いの間で実践する愛はどんな姿でしょう？だれかによって傷つけられて、悲しみや怒りを覚える時に、私たちの取る行動はその人との関係を断つことでしょうか？私たちにどう頑張っても返すことのできない罪の代価を支払ってくださったイエス様のことを覚えていながら、そのことを知っていながら、ほかの兄弟姉妹が自分に対して犯した罪を、いつまでも許さずに持ち続けるのでしょうか？それとも喜んで自分を捨ててキリストの友として、自分に与えられた神様の愛をみずから進んで示そうとするのでしょうか？神様の愛を知っている者は神様の愛で互いに愛し合つて、それをもって自分がキリストの友として歩んでいると証明する、あかしする、これがキリストの教える愛の証明でした。

4. 愛の効果 15-16節

そして最後、キリストの教える愛の真理の四つ目が15-16節に挙げられていました。四つ目の真理は愛の効果でした。まず15節に「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人の

することを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」と書かれています。イエス様は弟子たちに言われていました。わたしはもはやあなたがたをしもべと呼びません、わたしはあなたがたを友と呼びましたと。ここで友としもべということばが出てきますけれども、この違いは明白でした。この当時、しもべという存在は、主人にとって道具や持ち物のようなものでした。ですから、しもべというのは主人から言われたことだけを忠実にこなすことを求められていたのです。たとえそれがどんなに理不尽なものであろうとも、そこに全く説明がなかりとも、しもべは主人が言ったことにただ「はい」と言って従うことが求められていました。主人の考えはしもべには伝えられず、ただ無条件の服従が絶対だったのです。それがその当時のしもべでした。でも友は違いました。友というのは、自分の思いや考えを分かち合うことができる関係だったのです。互いに心のうちを知らせ合って思いやることができる、そんな関係でした。だからイエス様も言われるのです。「わたしはあなたがたを友と呼びました。」その後続けて、「なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです」と。これこそイエス様が地上に来られた大きな目的の一つでした。主は父なる神様がどんなに偉大な存在なのかを解き明かすために、この世に来られたのです。かつて私たちが救いを手にする以前、神様がどのようなお方なのか全くわかりませんでした。神様のすばらしさに気づくこともなければ、そこに価値を見出すこともありませんでした。だから私たちは逆らって歩んでいたのです。でも、キリストがこの地上にやって来られて、この方をあかしされたことによって、私たちは栄光にあふれる神様を知ることができるようになりました。

もっと言えば、私たちはキリストを通して、父なる神様のすばらしい愛を知ることができたのです。イエス様もかつてこのように祈られていました。ヨハネ 17 : 23 に「わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。」と書いていました。神の御子であるイエス様がこの世に遣わされたのは、父なる神様の愛をこの世に明らかにするためでした。ですからキリストの友と呼ばれる者は、キリストを通して神様のあわれみ深さや罪人に対する愛を目の当たりにすることができ、それを楽しむことができるのです。以前は確かに神の敵として歩み、滅んで当然の存在でした。でも、信仰によってキリストを通して神様のすばらしい偉大な愛を知ることができたのです。

でも、それで終わりではありません。イエス様は 16 節に「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」と続けています。ここではっきりと示されていました。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び」と。言い換えれば、救いというのはすべて神様のみわざだということです。私たちが救いへと導かれたのは、私たちが何かをしたからでも、私たちがキリストを選んだからでもありません。ほかのだれでもない主が私たちを選んでくださったのです。この神様の選びに関して、聖書は繰り返しいろいろなところでも教えています。パウロもエペソ 1 : 4-5 で「:4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。:5 神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。」と述べていました。神様が世界を造られるその前から、私やあなたが生まれるその前から、ただご自分のみこころのままに、キリストによってその愛のゆえに私たちをご自分の子にしようと定めておられたということです。だれもこの神様の選択に、決定に口出しできた者はいませんでした。その選びに対して何かしらの影響を与えることができた者はいませんでした。私たちはその時に存在しないわけです。だからこそ、本来であれば、すべてのものが罪ゆえに永遠にさばかれて当然の存在でした。この運命に私たちは何もすることができなかつたのです。で

も、神様がただ恵みによって救われる者を選ばれました。救いへと導いてくださったのです。だからこそ、私たちがこの選びの真理を覚える時に、自分の救いを覚える時に、神様に対して感謝しかないのです。どうしてこんな罪にまみれた私をほかのだれでもない神様が選んでくださったのだと、救いへと導いてくださったのだと。あなたは、救われた後も何度も罪を犯してしまう、そんな弱く愚かな者であると知っていてなお、私を救いへと導いてくださった、そのことを覚える時、その神様のすばらしい恵みや愛を覚える時に、私たちはへりくだって愛を実践しようとしませんか？

このように私たちが救いを得られたのはただ恵みでした。自分にとって愛することが難しい人物を覚える時に、私たちがまず覚えなれないといけないことは、神様は到底愛を受けるに値しない私を愛してくださいということでした。こうして主のすばらしい愛に心をとめる者は、互いの間でその愛を実践して歩もうとします。しかし、キリストの愛は私たちのうちにとどまっているものでもありませんでした。だからイエス様は16節でこう言われていました。16節の後半部分を見ると、「わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり」と、ここでイエス様は弟子たちに大切なことを思い起こさせていました。それは彼らが互いに愛し合うということの裏には、大きな任務が存在しているということでした。その任務は、彼らが出て行って実を結ぶということでした。言い換えれば、彼らの責任は、キリストの愛を携えてこの世に出て行って、まだ主を知らない人たちに福音を宣べ伝え、この愛のすばらしさをあかしすることだったのです。

私たちが感謝できることであり、忘れてはいけないことは、主が私たちにすばらしい愛を与えてくださったのは、私たち自身がそれを楽しむことができ、兄弟姉妹との間でそれを楽しむことができる、それだけではありませんでした。主はその愛を知った私たちひとりひとりが、主の御名のために出て行くことも求められていたのです。でも同時に、イエス様は私たちひとりひとりがこのようにして出て行く時に難しさを覚えることもご存じでした。だから最後16節の後半に「また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」と言うのです。もし私たちが人に対して愛に欠けることがあるのだとすれば、福音を携えて出て行く時に、熱意に、大胆さに欠けてしまうことがあるのだとしたら、イエス様が教えていたことは祈りなさいということでした。互いに愛し合うことも、失われた者にキリストの福音を大胆に宣べ伝えることも、それらすべてが神様のみこころになかったものであるからこそ、そんな祈りに神様は必ず答えてくださって、その助けや力を備えてくださると確信することができるのです。キリストの友として、神様の愛を知って、救いにおける神様のすばらしい恵みの選びの愛を覚える者たちは、互いに愛を実践するだけでなく、それをもってそのことを知らない世に出て行って実を結ぶのだと。

○まとめ 17節

終わりに、イエス様はこれまでのことばをまとめて17節でこう口にしておられます。「あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです。」と。兄弟姉妹たち、互いに愛し合いなさい。これがイエス様の変わらない命令でした。だとすればいま一度、自分自身にとって愛を示すことが難しいと感じる人のことを思い浮かべてみてください。確かにきょう見たように、私たちのうちには、キリストが愛されたようにその人を愛するための力はありません。だから私たちに必要なことは、その愛を可能にしてくれる愛の根源である神様の姿を覚えることです。その方にいつもとどまり続けることです。そしてもしその人が自分と同じように主を愛する兄弟姉妹として歩んでいるのだとしたら、その人もあなたと何ら変わることはない同じ主の愛を受けていることを覚えることです。その人に弱さや問題は確かにあるのかもしれませんが、でもそれは私たちも同じです。そして何よりそんな愚かな私たちが主はただ恵みによってあらかじめ選び、ただ愛のゆえに救ってくださったのです。私たちが覚えるべきはイエス・キリストの十字架でした。キリストの十字架の犠牲を忘れないことです。このすばらしい主の愛に心をとめて、自分自身に対して死に、そして互いの間で愛を実践していくことです。も

しかしたら皆さんが愛を示すことを難しく感じるのは、まだ主を知らない人かもしれません。だとすれば、なおさら主の愛のすばらしさを知った私たちには大きな責任があるのです。キリストの愛こそが何よりもすばらしいものなのだとことを伝えられるのは皆さんだけです。ですから、その主の助けを祈り求めながら、私たちは喜んでその愛を語り続けていくことです。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。私たちはこの先いろいろなところで失敗をし、互いを傷つけることがあるかもしれません。だからこそきょう学んだことを覚え続けてください。

私たちは新年度を迎えました。私たちひとりひとりが、何より神の家族である教会全体がますますキリストの愛を特徴づけるものとして、イエス・キリストの愛を覚えて、互いに仕え合って、互いに祈り合いながら、その主の愛をもって互いに愛し合って、ますます成長して行きましょう。